日向薬（くすり）事始め（その7）[1-4)]

－延岡における医学所「明道館」の設立と藩士教育－

山本　郁男[1,2]　井本　真澄[3]　宇佐見　則行[1,2]　岸　信行[2,4]

Historical Studies on the Origins of Pharmaceutical Sciences in Hyuga (Miyazaki) (Part 7)

― Foundation of “ Meidoukan ” , Medical School and Education for Young People (Han-shi) in Nobeoka Han, Hyuga during the Edo Period. ―

Ikuo YAMAMOTO[1,2]　Masumi IMOTO[3]　Noriyuki USAMI[1,2]　Nobuyuki KISHI[2,4]

Abstract

This paper concerns the foundation of medical school, “ Meidou-kan ” in Nobeoka, Hyuga during the Edo period. Activities and personal histories of both Kanao Niizuma and Zusho Hayakawa parcipated in the foundation of the school were described. Furthermore, it was also discussed on the educational system in Nobeoka, Hyuga for young people (Han-shi) in the Naito-han and others.

Key words： Kanao Niizuma, Zusho Hayakawa, Nobeoka-han, Meidou-kan, medicinal education, Edo-period
キーワード： 新妻金夫、早川図書、延岡藩、医学教育、明道館、藩士教育、江戸時代
2009.11.26受理

緒言

著者らは、これまで江戸時代、延岡藩を中心とする日向の医薬の発展の歴史を新しい切り口で報告してきた。すなわち、延岡における医祖といわれる渡邉正庵、寛永8年－文禄12年（1631－1699）を初めとする延岡藩の侍医達をとりあげると共にこの日向の地より大坂、緒方洪庵の適塾、長崎のシーボルトの鳴滝塾[2)]で医術を学んだ若者達を調査し報告した[1-4)]。

本報では、わずか7万石という小藩ながら、しかも度重なる藩主の交代をみた延岡藩が、その折々に文教政策をとった教養ある藩主、代官を得て向学の精神をもつ若者が育ってきた歴史的事実を述べる。この中で、特に江戸末期とはいえついに医学教育機関として「明道館」が安政4年（1857）独自に創設されている。これに尽力した新妻金夫と早川図書の二人の医師に焦点をあて、その周辺を述べると共にこの時代の藩士教育の状況を延岡藩と日向の各藩を中心にまとめた。

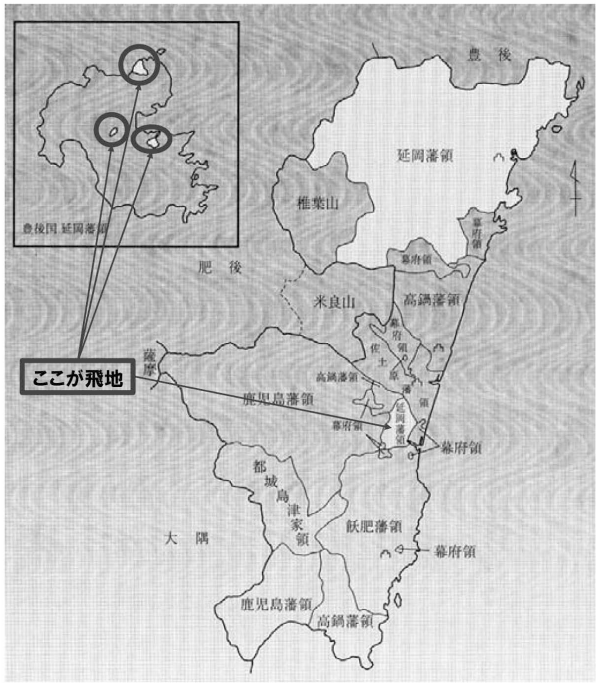
延岡（県）（あがた）藩の歴史

天正15年（1587）、豊臣秀吉の九州平定によって島津

[1] 九州保健福祉大学　薬学部　衛生薬学講座　〒882-8508　宮崎県延岡市吉野町1714-1
Department of Hygienic Chemistry, School of Pharmaceutical Sciences, Kyushu University of Health and Welfare, 1714-1 Yoshino-machi, Nobeoka, Miyazaki 882-8508 JAPAN
[2] 九州保健福祉大学　QOL研究機構　〒882-8508　宮崎県延岡市吉野町1714-1
Quality of Life Research Institute in Kyushu University of Health and Welfare, 1714-1 Yoshino-machi, Nobeoka, Miyazaki 882-8508 JAPAN
[3] 第一薬科大学　〒815-0037　福岡県福岡市南区玉川町22-1
Present address: Daiichi University, College of Pharmaceutical Sciences, 22-1 Tamagawama- cho, Minami-ku, Fukuoka 882-8508 JAPAN
[4] 宮崎・日向・富高薬局　〒883-0014　宮崎県日向市原町3-6
Takatomi Pharmacy, 3-6 Hara-machi, Hyuga, Miyazaki 883-0014 JAPAN
九州保健福祉大学　QOL研究機構　〒882-8508　宮崎県延岡市吉野町1714-1
Quality of Life Research Institute in Kyushu University of Health and Welfare, 1714-1 Yoshino-machi, Nobeoka, Miyazaki 882-8508 JAPAN

征伐に大いなる功績をあげた高橋元種が豊前国，香春城から日向国県（あがた）の松尾城に特封となった。このように当時は延岡藩となる以前は県（あがた）藩と呼ばれた。表‐1に、延岡城（県城）の藩主変遷史としてまとめたように、16世紀後半からの延岡は高橋、有馬、三浦、牧野と次々と細切れに藩主の交代をみた。その後、初めて内藤家は8代続き、ようやくにして城下町に他の藩と同じような繁栄をみたといってよい。図-1に内藤藩時代の日向国の地図（豊後（大分県）にも飛地があることに注意）を示した。

学問に大きな力を注いだ内藤藩時代、城下町延岡では藩学以外に自宅で塾を開くものも現れた。その後、延岡藩の植地（城下町以外の飛地領地をいう）であった南の宮崎地方（現在の宮崎市付近）にも代官所があり、幸いにも学者の代官が着任した。これらの代官は任期を終了後、延岡に帰省、再び教育に身を延した篤士家も少なからずいた。その中に白石立教、牧文吉、片寄元蔵、甲斐士幹（彼は主題とする新妻金夫の父の息女を嫁にしている親戚である）らの名がみえる。その結果、多くの向学心に燃える若者が輩出した。



図‐1　内藤藩時代の日向国図

しかし、一方、文化交流を阻害するこの日向の地は農民による騒動（一揆）が絶えなかった。文教振興に力を入れた藩とはいえ、このような反乱をかかえ、幾度か藩主の改易、御家断絶の憂き目をみた。特に、高橋（在職26年）、有馬（在職76年）はいずれも外様であり、三浦（在職20年）、牧野（在職35年）は譜代であったにもかかわらず、20年、35年と短期間であった。ここで、延岡藩における御家騒動に触れておこう。まず、慶長18年（1613）高橋元種は公郷、猪熊教利の家人であった水間勘兵衛の陰匿の罪に問われ改易されている。有馬直純はキリシタン大名、有馬晴信（島原・日野藩）の子であったため、父の影響を払拭するため、仏教に帰依、寺を建立するなど幕府からの目を避けると共に寛永15年（1638）の島原の乱にも出兵しているなど御家繁栄に力を注いだ。しかし、康純の時、元禄3年（1690）臼杵郡山陰（やまげ）の農民300戸、1422人が高鍋藩領土の股野原に逃散するという事件が起こっている。この原因は年貢の重課と郡代の苛政であったという。この事件において、農民は再三の命令にもかかわらず、元の土地に戻らなかったことから、翌年ついに幕府の裁定を仰ぎ、農民21人が磔刑、打首、遠島等の処分を受けている。もちろん郡代も追放処分。ついに三代藩主・有馬清純もまた元禄5年（1692）政道不行届の咎めにより無城地の越後国糸魚川へ転封となった。これもまた有馬が外様であり、延岡城の本丸の修築、城下町の整備などの突出した行動が幕府の戒を受けたとも察せられる。その後、三浦家からこれまでの外様藩より譜代藩へと変化はあるが、石高は2万3千石と最も少ない石高とされた。このように、幕府は延岡藩の縮小と共に日向国の天領を次々と拡大、天領とすることによって、直轄領土を増やし、自身の経済的基盤をより確実にしようとした。また、各藩の強力になることを防ぐことを意図したとみられる。しかし、その後の藩政で大きな負担となったのは臼杵、宮崎、児湯三郡および豊後国大分、国東、速見三郡などの飛地であった。

農民騒動は内藤藩になっても初代政樹の寛延元年（1748）、宮崎郡富吉村、高千穂三ヶ所村、翌年、宮崎五ヶ村にも勃発したが政樹はこれをよく鎮めている。この件数は31件に及ぶという記録が残っている。ちなみに詳述すると有馬時代2件、牧野時代5件、内藤時代31件、地域別では城付地4件、高千穂13件、宮崎8件、豊後6件であった。各城主はこれらの負の面を如何に克服するかを考え、危機感を若者に伝えるために逆に学問振興、文武両道奨励と転化したのかとも考えられる。しかし、当時もこの日向の地は陸の孤島といわれ、この地に文化の根を張らせることは相当の困難を伴ったことであろうと推察される。これらの不利な地でありながらどのような多くの優秀なる若者を育てた藩学興隆の土壌があったのであろうか。

表-1　延岡城（県城）の藩主変遷史

藩主名	藩主姓名（代）	西暦	和暦	在城期間	事項
高橋	高橋元種（初） 5万3千石 筑前国の秋月種実の子 高鍋藩の藩祖秋月種長の弟	1587（入封） ～ 1613（転封）	天正15 ～ 慶長18	26年 （外様）	豊前国香原より入封。関ヶ原の戦いでは最初西軍、後に東軍に寝返り、領土を安緒、県城を拠点として城下町をつくる。南町、中町、北町を整備。しかし、慶長18年罪人隠匿の罪で改易，常陸（茨城）棚倉藩に預けとなる。
有馬	有馬直純（初） 5万3千石 有馬康純（２） 有馬清純（３）	1614（入封） ～ 1690（転封）	慶長19 ～ 元禄3	76年 （外様）	肥前国日野江（長崎島原）より入封。五ヶ瀬川北側に元町、紺屋町、博労町。大瀬川北側に柳沢町を形成。城郭整備。三階槽建設。山陰坪谷村領民の逃散事件の責任により越後国糸魚川（新潟）に転封。
三浦	三浦明敬 2万3千石	1692（入封） ～ 1712（転封）	元禄5 ～ 正徳2	20年 （譜代）	県藩から延岡藩に改名。下野国主生（栃木）より入封。日本最南端日向国で唯一の譜代藩となる。後に三河国刈谷（愛知）に転封。
牧野	牧野成央（初） 8万石 牧野貞道（２）	1712（入封） ～ 1747（転封）	正徳2 ～ 延享4	35年 （譜代）	三河国吉田(愛知)より入封,日向国豊後国(大分県)国東三河国吉田(愛知)日向国豊後国大分県国東郡連児郡を治める。貞道京都所司代(江戸幕府の職名、京都に在勤、朝廷公家についてつかさどり、京都、奈良、伏見の町奉行を監督。社寺の管轄)となる。後に常陸国笠間(茨城)に転封。
内藤	内藤政樹（初） 7万石	1747（入封） ～	延享4 ～	9年 （譜代）	陸奥国磐城平（福島）より入封。以後明治維新まで8代123年間続く、数学を好む。久留島喜内、松永権平良弼、橋喜太郎を招く。
	内藤政陽（２）	1756	宝暦6	14年	藩学興隆、学問所（学寮、武芸所）設立、銅山開発
	内藤政脩（３）	1770	明和7	20年	植物方を置く
	内藤政韶（４）	1790	寛政2	12年	学寮設置明和5（1786）、財政再建、麻、椎茸、櫨、楮など有用植物植栽事業
	内藤政和（５）	1802	享和2	4年	文教政策、白瀬淡郷、岩切孝哲を長崎に派遣、オランダ医術を学ばせる
	内藤政順（６）	1806	文化3	28年	藩財政の窮乏、製蝋、製紙、薬種の専売買化
	内藤政義（７）	1834	天保5	28年	広業館、文武の活性化、明道館、大塩平八郎の乱，天保7年（1836）
	内藤政挙（８）	1862～ 1870	文久2～ 明治4	8年	明治維新（1868）

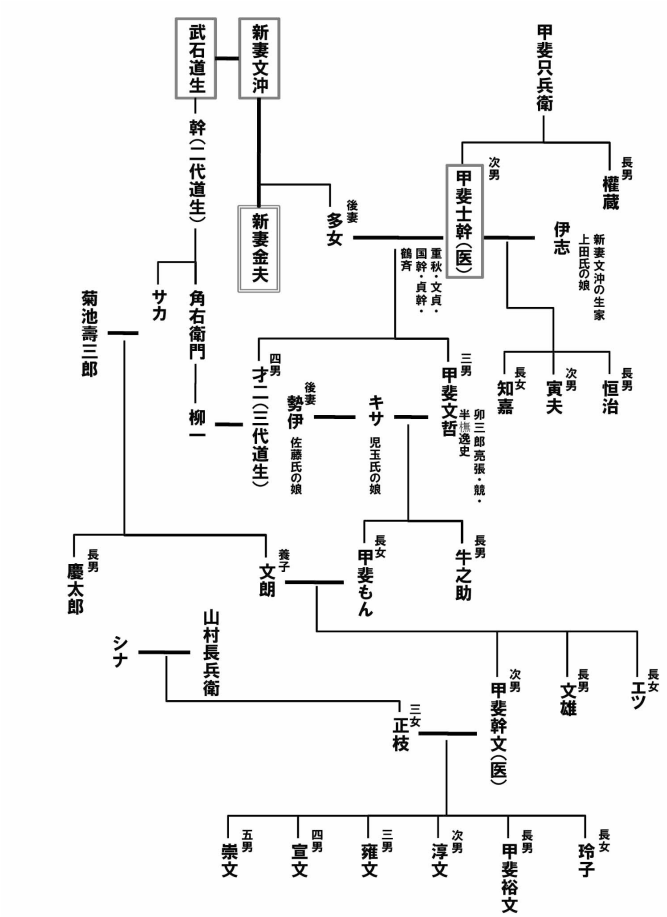


図 - 2　新妻氏家系図

医学所、「明道館」の設立[6)]

延岡藩における医育の初めは有馬藩時代の渡邉正庵といえる。彼についてはすでに先に報告[1)]しているので簡単に述べる。正庵は京都に学び帰藩後、私塾を開き、当時100人に及ぶ若者を教育していた。正庵の孫の渡邉新蔵もまた医師であり、彼の下に白瀬道順、白瀬永年がいる。彼等についてもすでに報告している[4)]。また、この頃、未だ明らかではないが、豊後杵築の三浦梅園（みうら ばいえん）、享保8年－寛政2年（1723－1790、儒者、医師）の下に3年間医と儒を学んだ武石道生、延享4年－天保3年（1747－1831）(図-2参照）がいる（図-2)。道生の友人である甲斐士幹、天明4年－天保8年（1784－1837）は、この論文の主題の人である新妻文沖の娘婿である。新妻金夫の父、文沖は子弟の教育に力を注いで医道の進歩に尽くし、新妻金夫に医学教育機関としての明道館建設を促した面があるなど、功績は大きいとされる[5)]。この時代の藩学は藩直営であり、明和5年（1768）内藤政陽（2代）が学問所（学寮）および武業所（武寮）を城郭内、本小路西端に設立した。

嘉永3年（1850）5月学寮を「広業館」と改称、内容をより充実させた。その頃より医学教育の必要性から城下南町（現在の延岡市南町、市役所付近か？）に形ばかりであった医学学問所を、後に内藤政義の時代になって、安政4年（1857）という明治維新までわずか10年という時期にこの延岡において「明道館」と命名し、青年藩士の医学教育の場を創立したのである（図-3)。これに甚大な協力を惜しまなかったのが内藤政義の侍医、新妻文沖、明和4年－文久4年（1767－1864）の教えを受けたその養子、新妻金夫（出生年不明－1864）と早川図書（1795－1859）であった。[7-9)]

著者らは、この医学所「明道館」を九州保健福祉大学薬学部の前身とみているのであるが、もし、明道館が明治、大正と続いていたならば、この延岡に医科薬科大学が創立していたかも知れない。

以下、新妻金夫について述べる。新妻金夫は文政2年（1819）頃、延岡城下に生まれたと考えられるが確かでない[11)]。

図‐3　内藤家中延岡城下屋敷付絵図（1850年頃）（明治大学刑事博物館）下図は現在（2008）の航空写真：延岡市役所広報課提供（左上の森の部分が延岡城）

後に延岡藩の侍医として名声の高かった新妻文沖の養嗣子となる。名を胤剛、字を金夫、号を双岳。文政11年（1828）京都の小石元端（こいしげんずい）（大槻玄沢の弟子）に蘭医を学んだ後、帰郷、延岡で開業。天保9年（1838）抜擢されて内藤政義の侍医となる。碌高130石。安政4年（1857）早川図書と共に延岡南町に医学所「明道館」を設立。青年達に医学を教えた。著述に「双岳詩集」がある。新妻金夫の墓は市内台雲寺に新妻家の合葬の形で残されている（図‐4）。

図‐4　新妻家の墓（台雲寺）

この明道館の設けられた年は江戸において西洋医学所の前進である「種痘所」がはじめて設立された同じ年（安政4年、1857）にあたることからも注目されることである。これによって、この日向の地においても子弟の医学専門教育の道が開け、わざわざ大坂、長崎へと遠隔の地に行かずとも勉学できたのである。藩もまたこれに補助を与えたので、学業もまたますます盛んになった。ひるがえって現在の延岡市をみるに、県立病院の医者不足を始め、県北医療は極めて貧しい。前述のごとく、もし、この医学所を母体として明治‐大正‐昭和の初期に医学部、薬学部が開学していたらと今さら思わざるを得ない。その基礎は確実に存在したのである。明道館の建っていた場所は、現在の南町、市役所の斜め前の裁判所（正門、事務室）附近である敷地内であると考えられる（図-3）。これが何故廃校になったのか、時が明治維新という改革の時代とはいえ、時期や原因に関しては、何んら詳しい文献がない。

以下もう一人の設立者、早川図書（はやかわずしょ）について述べる。早川図書（1795-1859）は寛政7年（1795）、延岡南町に生まれる。先祖は小早川隆景・秀秋。ゆえ故あって小早川の小をとって早川とした（図-5）。諱は隆、龍、字を白鱗、号を梅林、小荷と称した。俗称を宗吉といったが、後に

図書に改名。文政3年（1820）早川家を継ぐ。師は京都の川越佐渡守、彼の下で医術を学び、中島宋陰に漢学を学ぶ。その後、長崎に赴き山脇道作門下生となる。天保2年（1831）抜擢されて内藤政順の侍医。安政4年（1857）上述のように新妻金夫と協力して「明道館」を設立。侍医早川春村、棋村、仲安、正啓はいずれも早川図書と縁ある医家と考えられるが詳細は不明。墓は善正寺に先祖代々にわたる早川家の合葬の形である（図-6）。

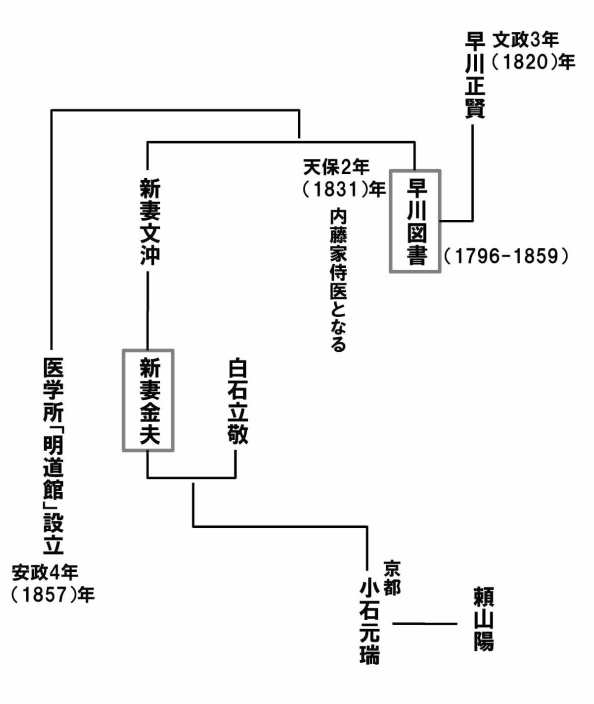


図 - 5　早川氏と新妻氏との関係図

ここで延岡藩における学問体系を記しておく。

16世紀から19世紀にかけて延岡藩における学問体系は復古学、朱子学、陽明学、折衷学、皇学、兼山学と当時、江戸、京都、大坂に流行していた学問を受け、小地方にしては、珍しくそれなりに繁栄していた。それらをまとめると次のようになる。[12,13]

1. 復古学（伊藤仁斎、萩生徂徠－京都）
→渡邉正庵（延岡医学の祖）→渡邉新蔵→白瀬道順→白瀬永年
2. 朱子学（頼山陽、森東郭－京都、大坂）
→甲斐士幹、白石立教、牧文吉、新妻金夫、片寄源蔵
3. 陽明学（佐藤一斉）→内田耕助、小松一郎
4. 折衷学（広瀬淡窓－日田、大分）→山室綱一郎、河野養貞、早喜太蔵
5. 皇学（本居太平）→武石道生、樋口種実、安藤通故→甲斐士幹
6. 兼山学（野中兼山）→島文蔵

延岡藩、広業館における当時のカリキュラムは和学、漢学、洋学、漢算、洋算、医学、皇学があり、その他、洋学、天文学、音楽などがあった。武芸は弓術、馬術、剣術、炮術、兵法、遊術、柔術、などがあった。医学が藩校に初めて導入されたのは宝暦年間（1751）であったが、当時全国272校中44校であった。例えば盛岡藩の作人館、鳥取藩の尚徳館、福山藩の誠立館などはいずれも医学所あるいは医学館として導入されている。[6]

図 - 6　早川家の各家の墓（善正寺）

延岡藩における江戸時代の藩士教育[11]

表－2は、当時の延岡藩における藩士教育場をまとめたものである。

延岡藩以外の日向の藩士教育[8,9]

また、南日向においては、大淀川の河口に城ヶ崎と赤江港（飫肥藩、宮崎市）があり、上方にも知られた町人文化が花開いた。また、隣の天領、本庄（国富町、渡邉正庵が2年間滞在）は、日田の代官（大分、日田）の支配下にあったので、文政6年（1823）頃からは先に報告[2]した日田、広瀬淡窓の咸宜園に勉強に行く若者も増えてき

た。中でも後に杉田塾を聞き塾生500人をこえた杉田房吉もその一人であった。その他、福島皇二、中尾時太郎などが有名である。

表 - 2　延岡藩における藩士教育機関（塾）

	名称	主催者	設立年代
ⅰ）	養英亭	瀧口向陽	不明
ⅱ）	崇徳館	内藤正順（7万石）	文化12年（1815）江戸
ⅲ）	広業館	山本興兵衛、内田耕助	弘化3年（1846）
ⅳ）	周済館	山本武俊	不明
ⅴ）	教学斉	小松一郎	不明
ⅵ）	明道館	早川図書、新妻金夫	安政4年（1857）

各藩の教育について記すと以下の通りである。

1）高鍋藩―明倫堂建立。8代秋月種徳、7代種蔵（宝暦10年、1760）は名君といわれ、木材、木炭、紙の生産だけでなくこの時代に「朝鮮人参」の栽培に意を注いでいる。これについてはなお詳細に調べて報告する予定である。

2）佐土原藩―文化13年（1816）9代島津忠徹は文政8年（1825）藩校「学習館」を設立。

3）飫肥藩―文化13年（1831）伊藤祐相の時代に藩学を興隆して藩校「振徳堂」を創設。儒者安井息軒父子を江戸より招いた。城の鬼門に位置する願成就寺（伊藤祐兵建立）は日向国の僧侶、または藩士の学問所として使われ、藩士教育の場として「談議所」と呼ばれた。

まとめ

以上、延岡藩において、安政4年（1857）新妻金夫と早川図書は計って医学教育の機関として「明道館」を創立。若者に医術を教育した。この明道館の設立が、九州保健福祉大学薬学部の源流とみることができないかと考えている。その他、日向における藩士教育について記述した。

謝辞

本論文作成に当たり、種々資料の御提供を頂いた延岡市薬剤師会、大崎春光先生に深謝する。

参考文献

1）山本郁男, 宇佐見則行, 井本真澄, 岸　信行：日向薬事始め（その3）－延岡の医祖, 渡邉正庵とその周辺－. 九州保健福祉大学研究紀要 8：187－192, 2007.

2）山本郁男, 井本真澄, 宇佐見則行, 岸　信行：日向薬事始め（その5）－日向出身の, 緒方洪庵, 適塾と広瀬淡窓・咸宜園に学んだ人々－. 九州保健福祉大学研究紀要 10: 209－216, 2009.

3）山本郁男, 宇佐見則行, 井本真澄, 岸信行：日向薬事始め（その4）―延岡藩侍医, 白瀬道順と白瀬永年―, 九州保健福祉大学研究紀要 9：169-175, 2008.

4）山本郁男, 宇佐見則行, 井本真澄, 岸信行：日向薬事始め（その６）―日向出身の、シーボルトとポンペ門下生およびその周辺―, 日本薬史学会2008年会（大阪）講演要旨集：p17, 2008.

5）二木謙一監修, 工藤寛正編：藩と城下町の事典, 日向国, 延岡藩, p620, 東京堂出版, 東京, 2004.

6）亮天社出版委員会, 延岡亮天社概況と周辺, 富永寿夫編集, p83, 1986.

7）延岡市教育委員会文化課, 延岡市内藤記念館, 築城400年記念「甦る延岡城」, 2003.

8）（社）宮崎県医師会：宮崎県医史, 1978.

9）日高次吉：宮崎県の歴史, 1955.

10）石川恒太郎：延岡藩の教育：宮崎県地方史研究紀要第3輯, 宮崎県立図書館, 宮崎, pp1-8, 1977.

11）松田仙狭：延岡先賢伝, 藤尾印刷所, 宮崎, pp19-22, 1956.

12）日本人名事典, 平凡社, 東京, pp311-317, 1966.

13）宮崎県百科事典, 宮崎日日新聞社, 宮崎, pp685, 1983.